

<実践報告>

中学校保健体育の教育実習における授業の教材選択に関する一考察

岩田 靖 信州大学学術研究院教育学系

藤田育郎 信州大学学術研究院教育学系

Considerations on Selecting Teaching Materials for Educational Practice  
in Junior High School Physical Education

IWATA Yasushi: Institute of Education, Shinshu University

FUJITA Ikuro: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	中学校保健体育の教育実習における運動領域の教材選択の重要性について、一事例を基に検討してみること。
キーワード	教育実習 中学校保健体育 素材 教材選択 附属学校と学部との連携
実践の目的	球技領域の種目を素材とした単元教材を用いて保健体育の教育実習指導を試みること。
実践者名	関谷北斗 中塚洋介 尾臺美彰
対象者	信州大学教育学部保健体育コース3年生
実践期間	2018年6月～9月
実践研究の方法と経過	教育実習において新たに単元として導入したバスケットボールの授業を対象にした指導教員による指導の感触や指導学生の学習の様態についての聞き取り調査を行い、その内容に含まれた実習指導および学部での事前指導の問題性を探った。
実践から得られた知見・提言	初めて臨む教育実習において、対象になる生徒の実態把握が不十分な状況の中で、生徒にとっても教える側の実習生にとっても複雑で高度な運動素材をもとにした単元教材の選択は、保健体育の教科における授業指導の実習成果に大きな影響を与えることが想像できる。したがって、生徒に適合するであろう、一定の授業成果が見込めると認められた既存の単元教材を選択させ、事前の学習内容や指導の段階についての検討を可能にしていく実習指導の方策の検討が必要であろうと考えられた。

## 1. はじめに

教員の養成教育において、大学・教育学部と附属学校が連携しながらその成果を充実したものにしていくことは重要な課題である。その中では、大学における教科教育・教科専門の授業と附属学校における教育実習をいかに結びつけていくかが中心的な視点となる。その際、学部からみた場合、将来的には、相互の連関のみではなく、教育実習の内容やその方法において、具体的な相互乗り入れ的な方策の探究が求められていると考えている。例えば、中学校の保健体育（体育分野）で考えた場合、教育実習において実習生が取り組む具体的な運動領域・運動種目（技）の指導に関わって、その学習内容研究や教材づくりに附属教員との合意の下に、教育実習の事前・事後的指導のあり方を工夫することなどはその一例になるであろう。

さて、このように考えるのは、体育分野においては、その指導内容に対応した「教科書」が不在であること、また、学習指導要領及びその解説には、指導する運動領域および授業の「素材」となる運動種目や技が例示的に掲げられてはいるものの、それらの選択や、さらに学習者に相応しく修正・加工していくこと（教材づくり）には、実は非常に高い能力が要求されているものと思われる。また、実際の授業の成果は、選択される教材（主として「単元教材」）に大きく影響されることは間違いない。そうだとすれば、養成段階の教育実習において、いかなる教材を選択するのかというのは、その実習指導において非常に重要な問題視点であろうと考えられる。したがって、中学校における特定の教科を基盤とした教育実習の際に、教育実習生がいかなる領域や単元を基に実習授業を行うのか、またそのいかなる選択が効果的な授業実践をサポートすることになるのか、いわば実習授業の「教材選択」（素材選択をも含む）の問題は実はかなり重要な意味を担っているはずである。その意味では、特に初めて経験する教育実習において、実際に生徒の前に立ち、授業における学習指導に向き合う場合に、そこにおいて媒介する学習内容・教材の中身は大いに配慮の対象になりうるものであろう。しかしながら、一般的にそのような思索や議論はこれまで低調のように思えるし、少なくとも体育科教育学における教師教育の研究や実践の重要な視点には据えられてこなかったと言える（高橋健夫ほか編 2010, 梅野圭史ほか編 2010, 日本体育科教育学会編 2011, 日本教師教育学会編 2017, 日本教科教育学会編 2017）。

そこで本報告では、中学校の体育授業における教育実習指導の中での一事例を取り上げながら、教育実習生が取り組むことになる「教材選択」の問題性について掘り下げて検討を試みることを目的とする。

## 2. 本報告の経緯

「附属学校と教育学部との共同」が強調されるようになっておよそ 20 年近くが経過する。信州大学教育学部でも、ほぼ時を同じくして、「学部・附属の共同研究」体制が整えられてきたと言える。その中で、附属長野中学校の保健体育科と学部・スポーツ科学教育グループでは、その教育実践研究において、附属学校の授業研究を学部がサポートする形でその連携を図ってきたが、教師教育の面では附属における教育実習と学部における教科の指導法の授業内容を結び

つける努力を試みてきた。例えば、学部での指導法に関わる必修科目「中等保健体育科指導法基礎」の授業の中で提示している体育授業観察法を教育実習に適用した岩田・早川（2008）の報告などはその一例であった。その延長的な意味合いでは、現在でも、附属の指導教員によって「よい体育授業の基礎的条件」に密接に関わる「期間記録法」（高橋編 2003）のデータを用いた授業の省察と改善の指導が行われてもいる。

これらの上に、近年、教育実習で取り組む運動領域・単元教材についても議論を始めた。ここでは4週間の3年次の実習を議論の対象としたい（信州大学教育学部の教育実習は、3年次4週間、4年次2週間が設定されている）。3年次の実習は6月に授業観察を中心とした1週間、および8月下旬から9月中旬にかけて授業実践を主とする3週間で構成されている（3年次は初めて実際に授業に取り組む段階である）。附属長野中学校の保健体育科で特定の運動領域の「単元」を受け持って授業づくりに向かうのは、実際には8月以降の3週間となる。

従来、この期間には、季節がら、「水泳」領域が中心的な単元として位置づけられ、その他、一部、「器械運動」「ダンス」が選択されていた。ただし、水泳はプールへの移動や生徒の更衣に時間がとられるとともに、体育授業における教師の四大行動（Siedentop 1983, 高橋 1989）のうち、「マネジメント行動」や「直接的指導行動」に不慣れな実習生の場合、一般的に十分な運動学習の指導時間が確保できない可能性が高い。また、これまで選択されていた運動領域は、個人的な運動が主要になるため、2018年度からグループでの協同的な活動が不可欠となる「球技」領域を新たに実習対象として加えることに変更した。実際には、「ゴール型」のバスケットボール、および「ベースボール型」のソフトボールを「素材」とした単元設定をそれぞれ数名の学生の選択対象とした。「教材化」（教材づくり）に関しては、指導教員が具体的なゲーム事例を紹介した上で、「ゴール型」「ベースボール型」それぞれの担当学生で学年段階に対応した「単元教材」を構想させている。その単元教材を基に、単元展開および各授業時案の作成を実習生に課している。

このような素材および単元教材の変更の上に実施したこの年度の3年次の教育実習のプロセス、さらに実習終了後、附属学校の3名の保健体育科指導教員から異口同音に、「バスケットボールでの実習指導は非常に厳しい」「バスケットボール担当の実習生はだいぶ苦しんでいるかもしれない」といった発言が相次ぐ実情にあった。過去、指導教員から実習生の個別的な指導上の問題が取り上げられることはあっても、このような特定の授業の「素材」（単元教材）に関わって共通した見解が交わされるのは非常に珍しいことであった（なお、同時に今回導入した「ベースボール型」の指導に関しては同様な意見表明は全く聞かれなかったと言ってよい）。

ここで、「珍しい」ことではあったのだが、実はこのような現象の中に、初めて教育実習に取り組む学生の指導において、かなり本質的な問題性が孕んでいると考えられる。そこで今後の実習における附属と学部での共同による素材・単元教材選択の可能性や学部における教科独自の实習事前指導のあり方を探る意味において、事例的に記録にとどめておくことを意図した。その意味では、今後の検討のための備忘録的な記述になる。

### 3. 3年次の教育実習の基本的な目標

それではここで、附属長野中学校保健体育科における実習指導の基本的なねらいについて概略的に触れておく。以下の表1は各週における「指導の重点」を示している。

表1 各週の指導の重点 (保健体育科)

第1週	①保健体育科の目標や学習指導の基本、生徒理解について、指導教員の授業を観察したり、生徒の姿を観察したりして理解させる。 ②授業参観や授業への参加を通して生徒と触れ合い、実習生としての心構えや実習に立ち向かう態度を育てる。
第2週	①指導教員の直接指導により、指導案作成の方法や指導技術の基本を習得し、本時案を作成して授業ができるようにする。 ②具体的な場を通して、学級集団や個々の生徒の理解と教材研究を深め、単元の展開を見通した指導案を作成する。
第3週	①第2週までの研究を基に、自分で指導案が作れるようになる。 ②相互に授業を見合って、厳しく深く追究できる。 ③単元の計画がわかり、見通しもった授業ができる。 ④単元の指導計画が立てられる。 ⑤相互研究、自己研究により、生徒を生かす指導案を作ることができる。
第4週	①生徒の主体性を生かした個性的・創造的な授業ができる。 ②他教科共同参観授業立案・授業および研究会を通して、研修を深める。

ここには週ごとを目安とした指導の重点が掲げられているが、その中心を占める「単元の計画」や「授業案」づくりを含めながらも、授業の立案およびその実施に関わる「教師の意思決定」の多面性において、実習生は授業づくりの全体を経験し、それらを深めていくことが期待されている。

さて、体育の授業づくりに向けてどのような意思決定が求められるであろうか。この意思決定が、実習生の学習の直接の対象として設定されることになると言っても過言ではなかろう。例えば、体育の「単元」に共通した授業づくりにおける教師の意思決定の対象について表2のような項目を掲げることができるであろう(岩田 2018)。

例えば、ここで問題にするように、中学校における教育実習において、ある一定のクラスを対象に「単元」を受け持って授業実践を試みるとすれば、少なくとも上記の項目群は実習生が思考せざるを得ない重要な学習対象になるのが一般的である。ただし、体育館やグラウンドなどの広い空間の中で、多様な用具を利用しながら運動学習を指導していく必要があるというところに、体育の授業の前提がある。上記の項目は、とりわけ授業の内容に関わった思考対象であるが、体育ではそれらに加えて授業を教室とは異なる場所で空間的・時間的に組織していくことに対する意思決定をも重視する必要がある。それは特に、「体育授業における教師の四大行動」

における「マネジメント行動」に関係している。また、体育授業における子どもたちの運動学習従事時間を確保していくという観点からすると「直接的指導行動」への時間配分の問題も「よい体育授業の基礎的条件」に大いに関係しており（高橋編 1994）、教育実習生の抜き差しならない学習対象であると言ってよい。

表2 体育の授業づくりに向けての教師の意思決定の対象

<p>①素材選択…単元で主要に取り組む運動課題の基になる運動の種目や技（素材）の選択。</p> <p>②教材づくり（単元教材）…単元の中での学習活動の姿を想定した素材を修正。</p> <p>③単元の「学習目標」の設定…単元教材を前提にした授業のねらいの明確化。</p> <p>④具体的な「学習内容」の抽出…具体的な学習の中身の抽出。</p> <p>⑤「教材づくり」（下位教材群）と「教具」…学習内容の習得を促す練習教材・教具の準備。</p> <p>⑥「学習カード」の工夫…学習活動を促進させるための学習カードの用意。</p> <p>⑦「学習形態」の選択…学習活動の組織形態についての選択。</p> <p>⑧「単元展開」の構想…単元全体をどのような道筋で構想していくのかについての検討。</p> <p>⑨毎時の「時間計画」の構想…毎時の授業の展開に関する検討。</p> <p>⑩授業の中での「教授行為」の構想…子どもたちに直接働きかけていく行為の構想。</p>
---

#### 4. 実習の指導教員の指導における印象や感想

##### 4.1 指導教員の印象や感想

さて、前記した表1のような実習指導の重点をベースに指導教員による実習生への働きかけが行われたが、3名の教員のうち、長野中学校において3年以上の保健体育科の指導歴を有する2名に、指導の困難さが指摘された「ゴール型」（バスケットボール）についての聞き取り（その困難さについての教員の自由な記述に基づいたもの）を行ったものが以下に示した事柄である。これはそれぞれの教員が直接指導した実習生のみでなく、ゴール型を担当したものの全体に渡った印象や感想である。

##### 【A 教員】

<全体的な印象や感想>

①ゴール型では、実習生が初めて授業をするのに、用意しておくことや考えておかなければならないことが非常に多いと言えるのではないかな。

②ゴール型で授業の成果を上げるのにはかなりの経験が必要で、生徒も実習生も授業での達成感が得られにくいのではないかな。

・一般的に、実習生は「既存の種目特有の技能を身に付け、その種目にできるだけ近似したゲームを行ったほうがよいのではないかな」という思考が強い。その背景には運動部活動のイメージが濃厚にあるのかもしれない。

・同時に、発達段階に応じた授業（単元）の目指す姿をイメージすることが難しい。その



ため、「単元を構想する」というイメージがわからないといった実態が強い。

このような一般的な実習生の傾向の上に、ゴール型はゲームの構造が複雑であるため、ゴール型に対して過去に経験の豊富な実習生は「難しいことを教えたがる」傾向がありそうで、実習生の目指す姿と生徒の実態が大きく乖離してしまう。逆に、このようなゲームにあまり慣れ親しんでいない実習生にとっては、ゴール型の複雑さから、「何を教えたらいいのかわからない」状況を生み出している。これらについて以下のように言えるかもしれない。

①生徒の実態の理解が不十分で、その実態に応じた教材化が難しい。

②素材であるバスケットボールの既存の形式にこだわり、ゴール型に共通する楽しさや魅力を焦点化することが難しい。

③強調すべき学習内容の視点からゲームを修正することが難しい（何を残して、何を削ればいいのか分からない）。

④実習生、得意な生徒、不得意な生徒それぞれのゲーム・イメージを一致させることが難しい。

したがって、教育実習においてバスケットボールなどのゴール型の教材づくりを生徒の実態把握を前提に実習生が試みることは非常に難しいのかもしれない。また、既存の教材化されたゲームを教員が紹介しても、実習生の生徒に対する実態把握が不十分であるために、その教材の価値を十分に解釈・理解して授業づくりに向かうことがなかなかできない。さらに、生徒たちにとっても複雑なままのゲームでは、工夫しようと考えたことがなかなか実行できず、学習の成果を感じられないで終わってしまっていたのではないかと。

## 【B 教員】

<全体的な印象や感想>

①球技領域のゴール型、特にバスケットボールは、実習生自身も中学校時代に授業を受けてきた経験があり、ゲームそのもののイメージはもちやすく、器械運動のような感覚運動系の領域に比べ、授業をやっているという感じは味わいやすいのかもしれない。

②ただし、実習生は素材の既存の形式（ルール）にこだわりがちで、生徒の実態が把握できなければ、特にゴール型ではゲームに難しさがあるため、目に見えた成果がでにくく、授業改善の方向を見出しにくいのではないかと考えられる。

上記の②の点において、生徒の実態把握ができないままに授業を構想しがちであり、実習生が考えてきた教材は生徒にとって非常に難しいままになっている。例えば、ゲームの人数もできるだけ5対5のフルゲーム（既存のルール）に近似したものを選択し、イーブンナンバーのゲームに終始こだわる様子があった（攻撃に数的優位の状況を生み出すアウトナンバーゲームの方が、生徒の学習を豊かにするとの発想が、生徒の実態把握の弱さから同意しにくい状況にあった）。また、実習生は通常のバスケットボールのように「フルコート」のゲームにしたいという願いがあり、既存のルールに縛られている様相が強い。

さらに、バスケットボールの授業では、どのような力を付けたらよいのかについて、実習生が生徒に説明できるところまでにはいかなかった。

ここに示した2名の指導教員におよそ共通した問題性の認識は以下の3点であると言ってもよいであろう。

- ①「ゴール型」の難しさ（生徒にとっての複雑さ、実習生にとっての指導の難しさ）
- ②実習生の生徒の実態把握の不十分さ
- ③実習生の既存の種目へのこだわり（教材化へのゲーム修正の難しさ）

このうち②の生徒の実態把握とは、生徒のゲームの先行経験や理解度、また技能に関する「診断的評価」とも言えるが、これについてはことさら「ゴール型」のゲームに限ったことではない。それは球技全般にも共通であろうし、他の運動領域を担当したとしても同様なことが指摘できるのであろうが、①における「ゴール型」の難しさが生徒の実態との乖離をより大きいものに行っていることを理解すべきであろう。

なお、③について、第1週から第2週までの期間における担当単元の事前準備の段階では、指導教員によるゲームの「ミニ化」（ゲームに参加する人数を減少させる）への示唆を受けて、バスケットボールの担当学生は「オールコートによる4対4のイーブンナンバーゲーム」を単元教材として構想していた。ただし、第2週開始後による指導教員とのコミュニケーションを通し、実際には「グリッド方式で攻守を転換するハーフコート制の4対3・アウトナンバーゲーム」が採用された。

ちなみに、「ベースボール型」のゲームでは、指導教員による教材紹介を通して、長野県内の公立中学校での授業実践例の豊富な「ブレイク・ベースボール」（岩田 2016）が実習生の指導対象として選択されていた。

#### 4.2 「ゴール型」の難しさ

ここで改めて①のゴール型の難しさを解釈しておく必要があるであろう。

ゴール型を含め、球技（ボール運動）では、一般的にゲームにおける状況に応じた「意思決定」とボール操作、ボールをもたないときの動きといった「技能発揮」を同時に要求されるところに特徴的な課題が存在しているとともに、そこに難しさが顕在化するが、とりわけゴール型では、この「意思決定」に関わって複雑さと高度差が潜んでいると言ってもよい。一般的に（あるいは世界的にも）、子どもや初心者にとって、ゴール型はその学習において非常に難しいと言われている（Werner & Almond 1990）が、この意思決定の視点から、その難しさを「意思決定の契機の多さ」「空間の流動的な変化」および「行動の自由性」といった観点から説明したい（岩田 2013, 2016）。それは以下の表3のようにである。

このような学習者にとってのゴール型の難しさは、自ずとその「学習指導」の難しさに結びつくのは言うまでもない。初めて生徒の前に立つ教育実習生であればなおさらである。さらにそのことは、指導教員の「実習指導」の難しさを生み出してしまうのである。

表3 「ゴール型」の難しさ

①「意思決定の契機の多さ」

ゲームの状況判断において、「味方」「相手」、そして「ゴール」の位置といった多くの「契機」（判断の拠り所になるモメント）が包み込まれていることである。例えば、今、攻撃側のボールを持たないプレイヤーであるとすれば、ボールマン（味方のボールを持ったプレイヤー）と少なくとも自分の周囲に存在する相手、そしてゴールとの関係の中で、自分の役割（ボールを繋ぐ、シュートチャンスに飛び込むなど）と位置取りを意思決定しなければならない。まずこのことに大きな課題性が潜んでいる。

②「空間の流動的な変化」

ゲーム展開が非常に速く、常に流動的な様相になることである。そこではゲームの状況の判断の「対象」となる「空間」（スペース）の意味が刻々と変化することも、子どもたちにとっての困難性の前提になっている。

③「行動の自由性」

バスケットボールのゲームを例にとれば、ゴールに対して180度の攻撃空間が存在するが、基本的にはボールをどこに持ち込んでも、どこに走り込んでも自由である。また、ドリブル・パス・シュートの選択もでき、パスにおいても誰を受け手として選り出すかも自由である。ただし、ゲームの中で「何をしたらよいかわからない」「どこへ動けばいいかわからない」という子どもたちにとっては、この自由が実は「不自由」を生み出している。

5. おわりに

先に表2において取り上げた体育の授業づくりに向けて教師の意思決定の対象に関する学習の全体像を初めて教育実習に臨む学生に期待するとすれば、当然ながら、授業づくりの根幹になる①素材選択、②単元教材づくり、③学習目標の設定、④学習内容の抽出の部分について、実習以前にできる限りの見通しを実習生が持ちうるものが重要であろう。なぜなら、これらの①から④は教科の目標・内容を直接に反映しているとともに、学習者の様態を読み取った上に成り立つ専門的力量であるからである。また、体育授業において、その授業のゴール・イメージを描きながら、既存のゲームを修正して単元教材を生み出すことは、力量のある経験豊富な教師にとってさえ容易なことではないからである。したがって、教育実習生にとっては非常に負担の大きい作業であると言える。とりわけ生徒の実態把握が不十分であれば、授業の現実には生徒の学習可能性からは大きく隔たってしまう、実習生に授業実施に関するマイナス・イメージを増幅しかねないのである。今回、とりわけゴール型のバスケットボールを素材とし、単元教材として用いた実習指導が難しかったとされたのは、このような必要不可欠な前提がほとんど満たされていなかった状況であったと解釈されるのである。

また、このような授業づくりの根幹をなす部分への見通しがなければ、⑤下位教材群の創出、



⑥学習カードの工夫、⑦学習形態の選択などは、非常に不安定なものにならざるを得ないのは当然であるし、そもそも表1に示された実習の指導の重点に掲げられた⑧単元展開の構想（単元の計画）や⑨時間計画の構想（指導案の作成）は厳しいものになるのは想像に難くないであろう。当然ながら⑩教授行為の構想（学習の内容や方法に関して「説明」「指示」「発問」したり、学習者の運動学習の様態をみとって「賞賛」「助言」などのフィードバックを与えたりしていくこと）も焦点を絞れず、揺らいだものにならざるを得ないことが推測される。

したがって、ここでは第一に、実習生が取り扱う運動の素材選択に十分配慮していくことを土台としながら、一定の授業成果を見込める「既存の単元教材」をモデルにしながら実習前・実習中の学習が展開できる附属と学部との協同的な指導の体制やプログラムを模索していく必要が示唆されるであろう。実際、今回の教育実習で取り上げられたベースボール型の単元教材は学部教員によって構成されたものであり、そのような教材選択が行われれば、今後、学部の授業や実習の事前指導と教育実習を有機的に結びつけた学生指導が組織できる可能性が十分認められるであろう。

## 付記

本研究は、JSPS 科研費 JP17K01632 の助成を受けて実施したものである。

## 文献

- 岩田靖, 2013, ゴール型のゲームにおける明示的誇張を考える, 体育科教育, 61(9), pp.74-75
- 岩田靖, 2016, ボール運動の教材を創る, 大修館書店, pp.35-36
- 岩田靖, 2018, 単元構想と教材づくり, 岩田靖・吉野聡・日野克博・近藤靖智編, 初等体育科授業づくり入門, 大修館書店, pp.34-44
- 岩田靖, 早川孝一, 2008, 学部の授業と教育実習の架け橋を求めて—体育科教育学における授業観察法の適用を手掛かりに, 平成19年度信州大学教育学部学部・附属共同研究報告書(平成19年度), pp.115-124
- 日本教科教育学会編, 2017, 教科教育研究ハンドブック, 教育出版
- 日本教師教育学会編, 2017, 教師教育研究ハンドブック, 学文社
- 日本体育科教育学会編, 2011, 体育科教育学の現在, 創文企画
- Siedentop, D., 1983, Developing Teaching Skills in Physical Education, Human Kinetics, Mayfield, pp.54-58
- 高橋健夫, 1989, 新しい体育の授業研究, 大修館書店, pp.208-221
- 高橋健夫編, 2003, 体育授業を観察評価する, 明和出版
- 高橋健夫, 岡出美則, 友添秀則, 岩田靖編, 2010, 新版・体育科教育学入門, 大修館書店
- 梅野圭史, 海野勇三, 木原成一郎, 日野克博, 米村耕平編, 2010, 教師として育つ—体育授業の実践的指導力を育むには, 明和出版

Werner,P., & Almond,L., 1990, Model of Games Education. Journal of Physical Education, Recreation & Dance, 61(4), pp.23-27

(2019年9月27日 受付)